

82年度
第2期テーマ
仲間意識

9月のテーマは
**歴史にみる
釜ヶ崎人情**

夜間学校
スー

釜ヶ崎夜間学校
西成区萩の茶屋2-18-18
喜望の家気付
電話 六四七-三九四六
(木曜日夜七時~九時)

**釜ヶ崎人情は
すたれたか?**

**自由なところ
釜ヶ崎**

と、山谷や寿から来た人はよく言いますが、今はどうでしょうか。
「なんやみんなてめえのことはばっかりで、人のことは誰とかさつてくれへん。冷たいやつが多くなった。」「だいたい金をもってるやつのところには、よう集まってくるけど、金もない着かんし、どうするところには

今まで仲間ずらしてても知らんふりしよる」

「昔は、本当に困ったことがあれば、みんなで助けあったもんあけど」
「なんや世の中みんな人間不信で騒いどるけど、釜ヶ崎も一般社会と同じよう人間不信になつてしまつたな」
「ハッからこうなつた仕事の内容が変わつてしまつて、雑役がふえりやあ、連

葛藤もつすいてしまつたやろつか。
**釜ヶ崎のうつり変りは
例えば戦後**

50年 (昭25年)
朝鮮戦争
ヤミ市、どん底景気

この頃はいろいろな仕事があった。完成した仕事にはわしららがやがたという誇り(ほり)があった。

60年 (昭35年)
安保斗争
三池斗争
技術革新設備投資で高度成長

釜ヶ崎オオ次暴動
みんな仕事も一生懸命やるし、そんなにもよつた。生きて働くことへの情熱があつた。

新幹線
東京オリンピック

道路建設埋め立て
南発造成

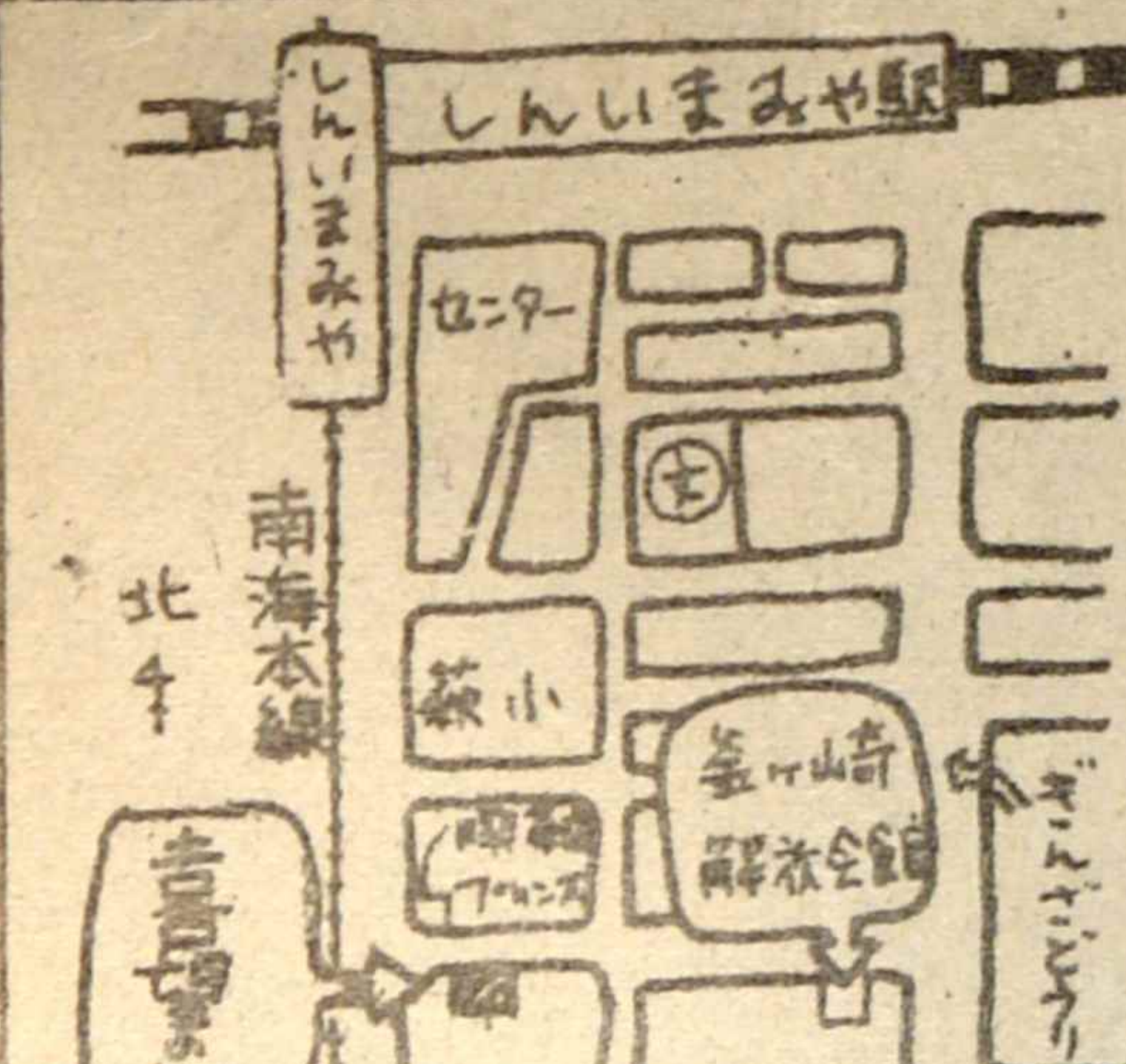
70年 (昭45年)
万国博 (手ぬき工事) はつきり

石油ショック、不況
高度成長の破たん
雇用状況悪化
越冬斗争と公園でもり上がる。

その後、仕事が減り、ドヤは新装警察署の治安対策強化などなことでなんとなく困窮しようにもいま一息では!!
これからのようなる
「このままじゃ、のたれ死にか。そうなつてたまさか」

まだ釜ヶ崎人情は
生きておる!!
わしらが集まるととき、人情はとつと厚く

なリカもわりて来る。
今晚七時待てる。



第2期第8回報告

8月のテーマ

「病気を通して仲間意識を考える」

「人間、孤独になる時は、病気になる」

病気になる

(Mさんの言葉)

10年間位、日雇いの仕事をしていたら、たいがい身体にガタがくるようです。これは必ずしも本人の責任に帰することができません。今、健康な仲間もいつ行旅病死させられていくかわからない現実を背負わされて生きています。そこでは、病気の問題はみんなの問題であり、病人に対する関わりは、自分自身に帰ってくるものと言えます。8月は、日常の中に埋没してしまっている我々の回りに起こる病気になる、た仲間との関わりを改めて向き直す所から始めなければ、我々を押しさえつけて

いるものを返す大きな力は生まれこえないのではないかと、ということと話し合いをすすめました。

一回めの話し合いでは、出席した人の多くが病気になる、たり死んでいった人を知っている、ということでした。それにしても、釜では、何かにつけて一人で処理していかなければならぬところがあつたし、自分が生きるのが精一杯なのだから友達に何かを求めようが、おかしい、という意見がありました。一方、自分にカイシヨウがないから、道で寝ている人を助けたくても

助けられない、という話しもありました。

そこで今回は、個人的な力でどうしようもないことでも、組合の医療班のようなシステムを知っていると解決できること

もある、ということと話し合いました。しかし、システムに頼っても限界があり、少人数が動いているという状態では、あまり力にならないことも事実です。

果して、病人をとりまく「仲間」というのは、具体的にはどんなものなのか？

現在、H病院に入院中のMさんには、かつて一緒にH病院に入院していた仲間が3人あつたが、今は3人とも中途退院。MさんはH病院を退院した時は、仲間と青カニし、一緒に生活する。再び入院した時は、日用品代が支給されるまでは、患者と

うしかしたり、かしてもらったり、仲間が入院している間は、酒を飲まないよう注意したりする関係があつた。

今日、Mさんの仲間の一人から手紙がきました。その中には、「H病院に居りますMさんは元気に成りました。どうですか。私も後どれだけ生き続けられるのか、頑張つて生き抜くつもりです。」と書いてありました。

参加者の一人は、50歳ぐらいの知り合いがまた、ここで元気に働いているからワシもまだ西成にしようかなと思う、とのことでした。案外、「仲間意識」というのは、そういう一見、さり気ない想いから芽生えるものではないかと思えます。

Mさんの場合

現在、H病院に入院中のMさんには、かつて一緒にH病院に入院していた仲間が3人あつたが、今は3人とも中途退院。MさんはH病院を退院した時は、仲間と青カニし、一緒に生活する。再び入院した時は、日用品代が支給されるまでは、患者と

